

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 5 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21560625

研究課題名（和文） 介護施設の小規模化に伴う人権を尊重した個別入浴介護を支える環境の検討

研究課題名（英文） Research to support the care of nursing home bathing environment that respects individual human rights

研究代表者

齋藤 芳徳（SAITO Yoshinori）

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：40330641

研究成果の概要（和文）：研究目的は、介護施設の入浴環境において、人権を尊重した個別入浴介護の必要性と安全で快適な介護環境の条件を探ることである。多様なハード（介護空間・介護浴槽）とソフト（個別入浴介護）を導入した特別養護老人ホームでの実証的な調査の結果、個別入浴介護を支える為の6つの環境のポイント（①少人数化、②プライバシーの確保、③介護者の負担緩和、④ユニバーサルデザイン、⑤ユーザビリティ(使い勝手)、⑥事故防止）を導き出した。

研究成果の概要（英文）：Research objective is to find a bathing care of environmental conditions that respect human rights. A result of the investigation in nursing homes, were derived the following six points of the environment to support the care of individual bathing. (①Over small, ②ensure privacy, ③ease the burden on caregivers, ④universal design, ⑤usability, ⑥accident prevention)

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学 都市計画・建築計画

キーワード：介護施設、小規模化、人権尊重、個別入浴介護、介護浴槽、温熱環境

1. 研究開始当初の背景

現在、介護施設では小規模化・ユニット化が進められている。小規模化・ユニット化の目的は人権を尊重した介護であり、これまでの流れ作業的な集団介護から個別介護への移行を目指している。小規模化・ユニット化は、従来の3大介護（食事・排泄・入浴）の中でも、食事介護と排泄介護に大きな影響を与えており、個人情報の把握により、食事の

量や好みの理解、排泄パターンの把握によるトイレ誘導など、介護の質が向上するといわれている。

一方、入浴介護は施設の入浴環境に依存する部分が強いため、これまで普通に入浴していた利用者でも、ADLが低下した場合は機械力に頼った特殊入浴に一挙に移行してしまう例もみられる。また、介護効率のみを重視した流れ作業（作業分担方式）の入浴介護が行われているケースでは、不特定多数の介護

者が関わる入浴環境が、利用者の羞恥心を傷つけている可能性は高い。さらに、認知症グループホームや小規模多機能居宅介護施設では、家庭用のユニットバスが設置されている施設も多く、認知症のユーザーインターフェイス面からの利点はみられるものの、利用者の介護度の重度化への対応や、小規模（＝少人数）であるが故のマンパワー不足の問題や安全面の問題などを抱えている。加えて、利用者のADLの変化（独歩～車いす利用時まで）に対応する介護入浴環境のユニバーサルデザインに関する研究も少ない。

これまで申請者らは、小規模生活単位型特別養護老人ホーム（施設自体は大規模）に関する一連の研究の中で、人権を尊重した入浴に関する研究に取り組み、介護効率のみを重視した流れ作業（作業分担方式）による介護から、できる限り利用者:介護者（1:1）での介護を目指すマンツーマン方式によるソフト（個別入浴介護）とハード（介護空間・介護浴槽）の必要性を明らかにしつつある。しかし、認知症グループホームや小規模多機能施設など、複数の浴槽の設置が困難な小規模施設的环境下でも援用可能な、介護入浴に関する知見は十分とは言い難い。

本研究の対象は、介護保険下の施設サービスである特別養護老人ホームであるが、認知症グループホーム・介護付有料老人ホーム・介護付高専賃など居宅サービスや小規模多機能施設などの通所サービスの利用者の介護度の重度化も視野に入れて、介護量が必要とされる入浴に関する利用者の自立支援、QOLの向上、安全性、介護負担の軽減などに寄与するための環境的な示唆を得るものである。

2. 研究の目的

(1) 研究の目的

小規模化する介護施設の入浴環境において、人権を尊重した個別入浴介護の必要性和安全で快適な介護環境の条件を導き出すことである。小目的は、以下のとおりである。

①利用者：介護者（1：1）の個別入浴介護における介護スタッフの介護量に及ぼす影響を科学的・客観的に評価し、介護負担を軽減しつつ、安全で快適な入浴介護環境に関する条件を探る。

②ユニバーサルデザイン浴槽（一つの浴槽で、独歩～車いす利用者まで入浴可能な浴槽、以下UD浴槽）と複数の異なる介護浴槽の利用実態の比較により、介護負担を軽減しつつ、利用者の残存能力を引き出しながら自立を支える介護空間と介護浴槽の条件を探る。

(2) 研究の位置

本研究に関連する先行研究の蓄積は極めて少ない。建築学分野では、作業分担方式（流れ作業）の入浴介護の研究¹⁾はみられるものの、個別介護を想定した入浴環境について検討した研究は、申請者らの研究²⁾のみである。また、複数の浴槽の設置が困難な小規模施設的环境下でも援用可能な、介護浴槽のユニバーサル化に関する研究も申請者らの研究³⁾のみである。福祉工学分野でも、入浴介護負担の軽減については、単に介護浴槽を機械化する等、利用者の残存能力を引き出す視点や認知症に配慮する視点に欠けた研究が多く⁴⁾、介護学分野においても、個別入浴の効果について取り上げた申請者らの先行研究を除けば、現場職員による実践報告のみである⁵⁾。

注 1) 動作観察にもとづく入浴環境と福祉機器に関する研究、徳田哲男・児玉桂子、理学療法科学、10(4)、1995

2) 個別入浴ケアを想定したケアと空間が高齢者に与える影響－特別養護老人ホームにおける入浴に関する研究その1、山中直・齋藤芳徳・他3名、日本建築学会計画系論文集、No.599、2006

3) 虚弱高齢者の自立を支える介護浴槽に関する評価、齋藤芳徳・松本正富・他4名、川崎医療福祉学会誌、Vol.15 No.2、2006

4) バッテリー式介護入浴移動車の開発、吉川貴士、第20回リハ工学カンファレンス講演論文集、2005

5) ユニットケアの食事・入浴・排泄ケア、市川禮子編、かもがわ出版、全190頁、2005

3. 研究の方法

(1) 研究計画・方法

①調査場所:小規模生活単位型特別養護老人ホーム「ハピネスあだち（東京都足立区）」。当該施設はH18年開設、1ユニット10個室、各フロア5ユニット、計15ユニットの施設で定員150名、全室個室・ユニット型の高齢者居住施設である。多様な介護浴槽（ハード）と個別入浴介護（ソフト）を導入した施設環境（図1）で、小規模処遇の介護入浴における利用

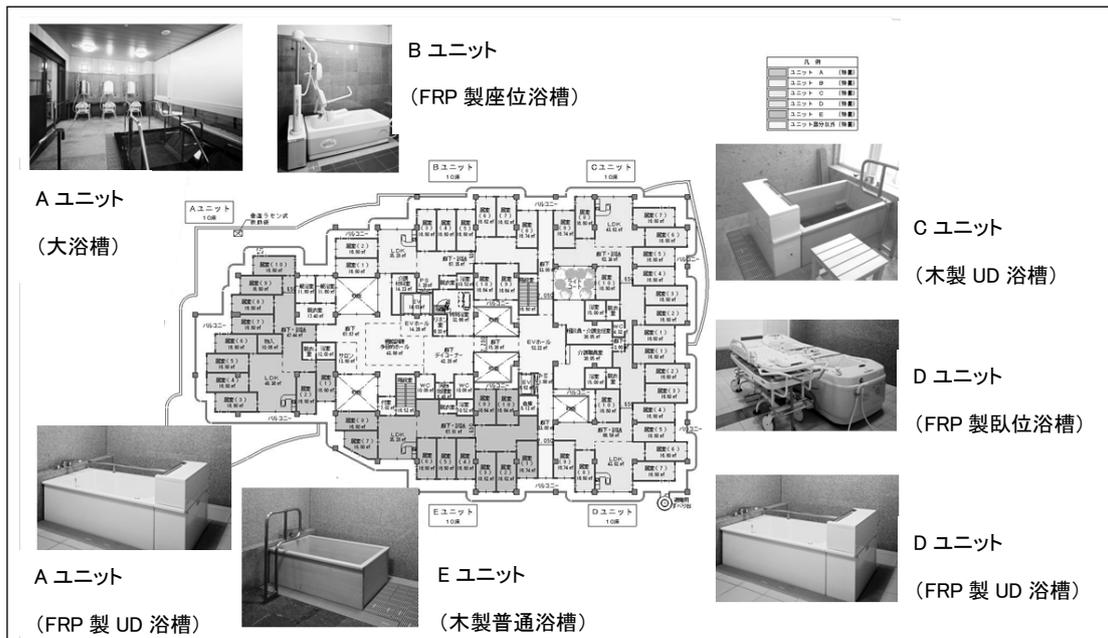


図 1 施設の平面図と介護浴槽

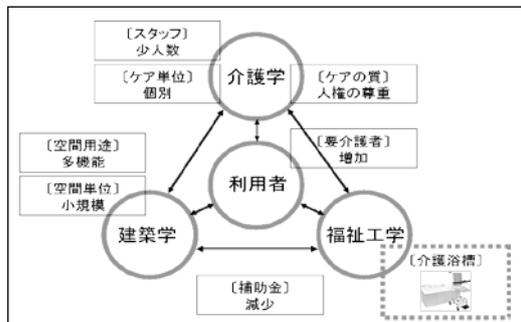


図 2 介護施設の利用者を取り巻く環境

者のQOL向上と介護負担の軽減に寄与するための環境的な示唆を得る。

②調査対象：利用者 60名【1ユニット 10名×6ユニット】+ケアスタッフ 15名【1ユニット 3名×6ユニット】

③調査体制：介護施設の利用者を取り巻く環境（図2）を踏まえて、建築学、福祉工学、介護学の専門家が領域横断的に連携して研究目的を達成する。

□建築学分野—小規模環境下に適した介護入浴に関する浴室の寸法体系や配置計画の提示

□福祉工学分野—利用者の残存能力を引き出しながら自立を支えるUD浴槽の形状や機能の提示

□介護学分野—介護負担を軽減しつつ、安全で快適な入浴を支える介護環境の提示

④調査内容

□ヒアリング調査

・調査対象者の基本属性に関するデータを得る。

・調査対象ユニット勤務の介護スタッフから、利用介護浴槽や個別入浴介助の現状および経年変化に関するデータを得る。

□入浴介護時の動作分析調査

・ビデオなどの解析装置を用いて入浴介護動作を測定し、個別入浴に関する浴室の寸法体系や、利用者のQOL向上と介護負担を軽減するための浴槽の形状や機能に関するデータを得る（主被験者は学生などの健常者、利用者のシミュレーション調査が可能な場合は協力を依頼する）。

□入浴介護時の温熱環境調査

・サーモグラフィーなどの解析装置を用いて入浴介護動作を測定し、個別入浴に関する浴室と他の居室における介護者の体温表面温度や衣服表面温度の温熱環境に関するデータを得る。

4. 研究成果

(1) 研究成果

多様なハード（介護空間・介護浴槽）とソフト（個別入浴介護）を導入した特別養護老人ホームでの実証的な研究の成果は、以下のとおりである。

□人権を尊重した個別入浴介護を支える環境の6つのポイント

①少人数化：個別入浴介護の導入により、利用者に関わる介護者数が6人から2人に減少した

②プライバシーの確保：浴槽と脱衣所を1：

1にすることで、複数の介護者と半裸の利用者の動線の交錯などが解消され、プライバシーの確保につながった

- ③介護者の負担緩和：利用者も介護者も心身状況は日々変化するため、必要なときにリフト（機械）を利用することで介護者と利用者ともに身心的負担が緩和された
- ④ユニバーサルデザイン：1台で多様な利用者が入浴できる浴槽が、省スペース化・省コスト化につながった
- ⑤ユーザビリティ（使い勝手）：馴染みのある浴槽形状は、利用者の残存能力を引き出すことにつながった
- ⑥事故防止：広すぎる浴室は、冬季の利用者のヒートショックの問題を抱えていた。また、介護者の体温表面温度や衣服表面温度差の低下（風邪の一要因）につながっていた

(2) 研究の位置付け

本研究の基礎となる研究は平成14年から始まり、平成16年以降は、本研究に関連するワークショップが国際福祉機器展（東京）やバリアフリー展（大阪）で毎年開催され、近年の介護施設の個別入浴介護の普及に繋がっている。

(3) 今後の展望

上記(1)の物理的な入浴介護環境研究を進める中で、利用者と介護者の精神的ストレス度・肉体的疲労度を軽減する必要性を感じたため、学生を被験者にして、自律神経バランス分析測定機器を用いて、精神的ストレス度・肉体的疲労度の測定に関する研究準備を進めた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ①齋藤芳徳、五十嵐崇道『特別養護老人ホームの個別入浴介護を支える温熱環境の検討』茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術），61巻，印刷中，2012，査読無
- ②齋藤芳徳、松本正富，山口健太郎『利用者の人権を尊重した個別介護を支える入浴環境の検討』茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術），58巻，123-133，2009，査読無

〔学会発表〕（計2件）

- ①齋藤芳徳，山口健太郎，三浦研，『介護施設における個別入浴介護を支える環境の検討』，2010年度日本建築学会学術講演梗概

集E-1，pp1037-1038，2010，富山

- ②齋藤芳徳，『特別養護老人ホームにおける集団入浴と個別入浴の介護環境比較』，第25回リハ工学カンファレンス講演論文集，pp203-204，2010，仙台

〔図書〕（計5件）

- ①齋藤芳徳（他10名），医学書院，『小児から高齢者までの姿勢保持—工学的視点を臨床に活かす』，2012，印刷中
- ②齋藤芳徳（他18名），八潮社，『地域計画の射程』，2010，pp292-311（総ページ数366）
- ③齋藤芳徳（他22名），彰国社，『生活空間の体験ワークブック』，2010，pp118-119（総ページ数139）
- ④齋藤芳徳（他8名），日本医療企画，『介護職員基礎研修課程テキスト4（第2版）認知症の理解』，2010，pp119-135（総ページ数246）
- ⑤齋藤芳徳（他8名），日本医療企画，『介護職員基礎研修課程テキスト5（第2版）介護におけるコミュニケーションと介護技術』，2010，pp377-421（総ページ数455）

〔その他〕

ホームページアドレス

<http://info.ibaraki.ac.jp/scripts/webse/arch/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 芳徳 (SAITO YOSHINORI)
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号：40330641

(2) 研究分担者

松本 正富 (MATHUMOTO MASATOMI)
川崎医療福祉大学・医療福祉マネジメント学部・准教授
研究者番号：20341159